

大山古墳墳丘部崩形にみる尾張衆黒鋌者の関わりからの検討 — 誉田御廟山古墳墳丘部崩形との関連性をふまえて —

川 内 眷 三

本研究は、大山古墳墳丘部の崩形について先行研究の問題点を分析するなかで、崩形要因についての検証を試みる。その方法として、①大正15年（1926）の「陵墓地形図：二千分之一図」を用い、大山古墳墳丘部崩形の微地形の抽出とその特徴を把握する。②誉田御廟山古墳墳丘部崩形の原因を、誉田断層の断層活動として分析した研究が確証として位置づけられているため、これとの比較検討によって大山古墳墳丘部の崩形の地滑り面の特徴を分析する。③墳丘部に開析地の地形がみられることから、谷筋に付せられた「尾張谷」の名称とともに灌漑水利との相関関係について検討を試みる。大山古墳墳丘部の崩形を示した「陵墓地形図：二千分之一図」は、詳細に地形を描写する唯一の貴重な資料であり、この分析によって研究の糸口がみいだせる。地形図による大山古墳墳丘部崩形の考察をふまえて、④大仙陵池に関連する記事が散見される「老圃歴史」の文書に記載される「尾張衆黒鋌者」の動向に着目し、大仙陵池に関わった背景を考察する。⑤間接史資料の引用であることから、さまざまな課題が付随してくるため、これらを整理するとともに、周辺地域をはじめ各地での「尾張衆黒鋌者」の動向をふまえ、「尾張谷」との整合性の背景を探る。推考の前提として、溜池築堤・補修、河川堤防工事、砂防工事、道路工事、新田開発、山を切り崩し畝増しなどの改修工事に関わってきた尾張国からの出稼ぎの水利土木技術集団という観点から、「尾張衆黒鋌者」と「尾張谷」の相関を核として位置づけ、大山古墳墳丘部崩形に対する私見を提起する。

キーワード：大山古墳、尾張衆黒鋌者、尾張谷、陵墓地形図、地滑り面、老圃歴史、誉田御廟山古墳、大仙陵池

1. はじめに

最大の方後円墳である大山古墳（大仙陵、仁徳天皇陵）〔第1図A〕の墳丘部（墳丘長＝486m、墳丘長の出典は、石部正志『大阪の古墳』松籟社、1980.140頁掲載資料による、以下同）は、大きく崩形していることが、大正15年（1926）の旧宮内省帝室林野局作成の「陵墓地形図：二千分之一図・仁徳天皇百舌鳥耳原中陵之図」¹⁾によって確認される〔第2図〕。こういった大山古墳墳丘部の崩形の姿態をとらえ、巨大古墳の墳丘部未完成説、中世の城塞が築かれ、後世に手が加えられ改変された人為説、さらに地震などの外的営力が加わった自然崩壊説が展開されてきた。

(1) 先行研究

(a) 巨大古墳未完成説と城塞築造説

大山古墳墳丘部の崩形について、地形の型状から検討を加えたのが綱干善教で、誉田御廟山古墳（誉田陵、応神天皇陵）墳丘部（墳丘長＝417m）の北西端〔「陵墓地形図：二千分之一図・応神天皇惠我藻伏岡陵之図」、第3図、注記1〕と、大山古墳墳丘部の崩形部分の地形が自然的な形成をなしているという見地から、両古墳とも部分的に未完成であったと推察できるのではないかととらえる²⁾。こういった大山古墳墳丘部未完成説は、貞享元年（1684）に出版された衣笠一閑著の『堺鏡』に、「諸国ヨリ來テ此陵ヲ築シ尾州ヨリ歩遅來故其築殘ハ其儘谷トナレリ今ニ尾張谷ト云リ是俗説未考實否」という記述がみられ³⁾、これがその端緒といえる。

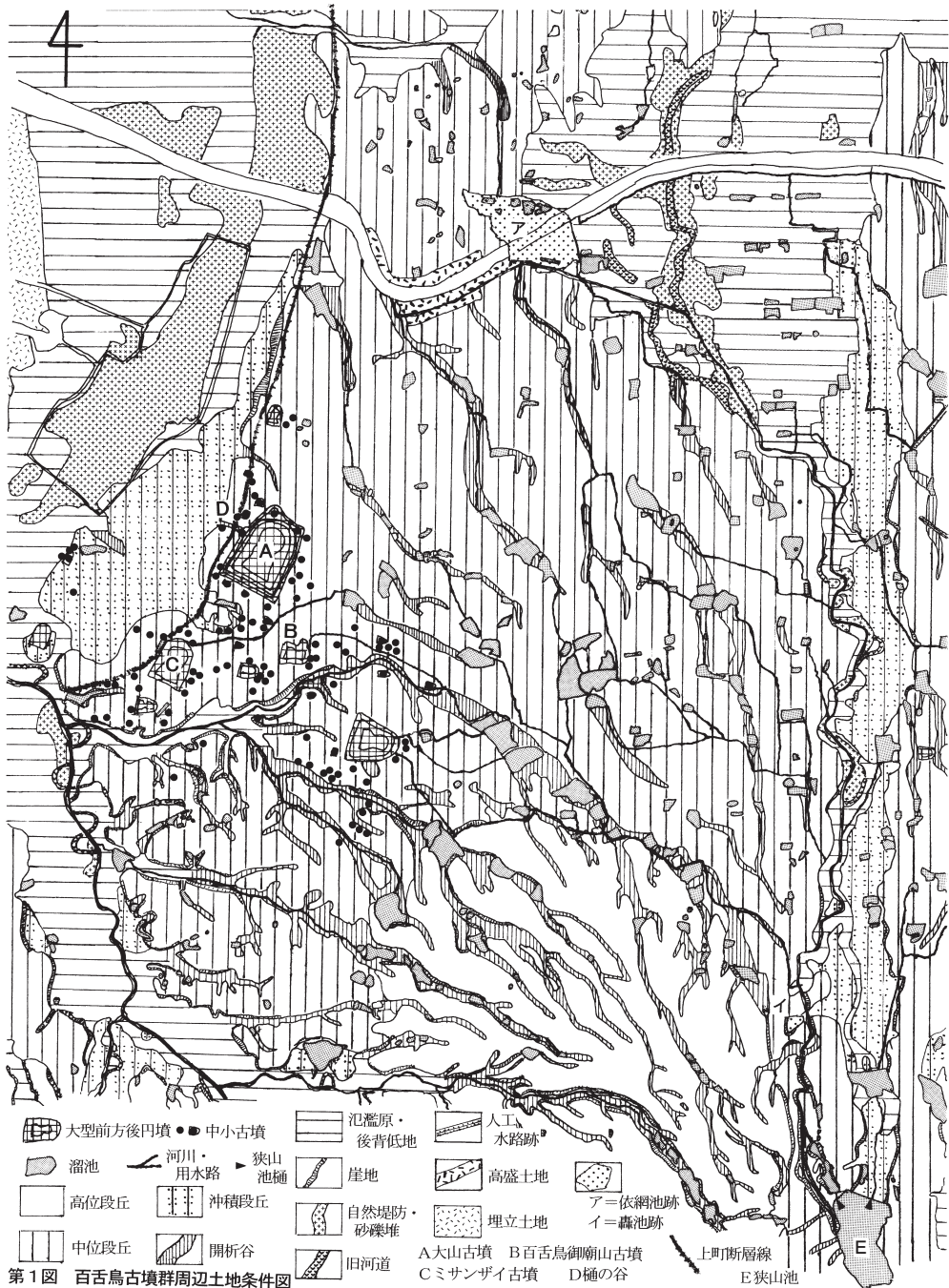
城塞築造による人為説では、綱干の未完成説より早くに、井上光貞が大山古墳墳丘部の架空探訪記として「墳丘の西側にまわると損傷がひどいの気づくが、これは戦国時代に城塞として利用されたためであろう」としている⁴⁾。その根拠についてはふれられておらず、井上の大山古墳に対してのそれまでの見聞をもとに、その想いを膨らませて記したものであろうか。これらの経緯をふまえて、森浩一は、墳丘の仕上げ工事が未完成であるという見方と、中世に城塞として利用されたことによる部分的破壊とする見方の両論があることを紹介し、巨大古墳築造の幾つかの課題を提起している⁵⁾。

大山古墳の墳丘部の崩形をめぐって、後世の人為的なものと考えられるとしながら、誉田御廟山古墳の崩形の事例とともに、それまでの各説の経緯を詳述したのが上田宏範である⁶⁾。さらに中井正弘が、大山古墳の興味ある各課題を解説しながら、墳丘部崩形の等高線の乱れが自然地形を残しているとして、城塞説について疑点を抱きつつ各説の経緯を概述している⁷⁾。堀田啓一は、応永6年（1399）の室町幕府と大内義弘が戦った「堺城」が堺に近く、最も城を築くのに適した所は、大山古墳の他に考えられないととらえている。そして、交通の要衝という大山古墳の地理的な位置と、小谷を含む台地西端に築造されるという立地環境や活断層に、その原因が求められるとし、後世の城塞築造による人為説と、自然条件の崩壊説の両説が妥当な考えであろうとしている⁸⁾。堀田の自然崩壊説は、その論拠を示していないものの、後述する日下や寒川の見解に影響を受けたものとみられる〔後掲1. (2) (b)、後掲2. (1)・(2)〕。

(b) 外的営力による自然崩壊説

考古学を基調とした概念論がみられるなかで、日下雅義は誉田御廟山古墳が位置する周辺の地形環境を復原し、構造線の活動によって地震が発生し、墳丘の一部が崩落すると同時に中堤の低下をもたらしたものと分析した論文を発表している⁹⁾〔第3図、後掲2. (1)〕。この誉田御廟山古墳墳丘部北西端の崩形の延長として大山古墳墳丘部の崩形にふれ、崩れというより滑った可能性が強いという地滑り現象を示唆する見方に立っている¹⁰⁾。しかし、日下の大山古墳墳丘部に対する地滑りによる自然崩壊説は、誉田御廟山古墳墳丘部北西端崩形の緻密な地形環境の分析と比べ、既述した感が強く精査して論証されたものではない。

こういったなかで、寒川旭が日下の研究を発展させるような形で、誉田御廟山古墳の崩形について、誉田断層及び周辺の地形型の分析をふまえ、活断層の真上で発生した異常現象を実証



第1図 百舌鳥古墳群周辺土地条件図

資料：国土地理院 1:25000 土地条件図大阪東南部・大阪西南部、1983。国土地理院 1:25000 都市圏活断層図大阪西南 0 500m 1km
部、1996。『堺の文化財—百舌鳥古墳群』堺市教育委員会所収、1999。「百舌鳥古墳群分布図」をもとに作成。

的に考察する¹¹⁾〔第3図、後掲2. (1)〕。そして、大山古墳墳丘部の崩形については、後円部2ヶ所の円弧状、前方部東側に墳丘部中段より上部に認められる200mの滑落崖、さらに前方部西側の墳丘中段より上部の220mの滑落崖、他1ヶ所、計5ヶ所の地滑り跡を検証し〔第2図、後掲2. (2)〕、こういった大規模な地滑りが生じる原因として、大量の降雨や墳丘への浸透水の作用、地震にともなう激しい震動などが考えられることを指摘している¹²⁾。

(2) 各説に対する疑念と位置づけ

(a) 未完成説について

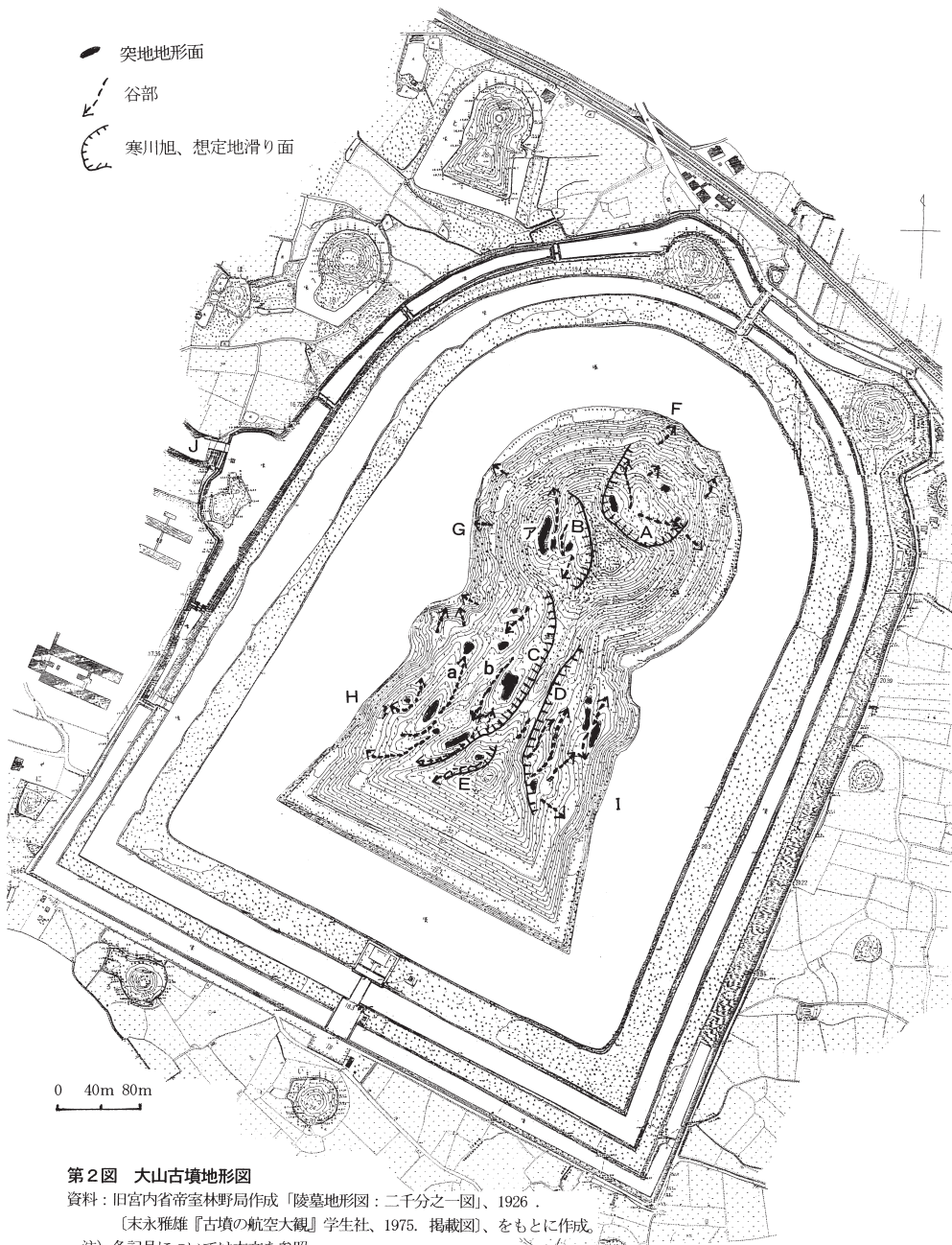
筆者は、これらの大山古墳墳丘部崩形についての諸見解と接するなかで、幾つかの疑念を抱くこととなった。なかでも未完成説については、大山古墳が古墳時代中期とされる大型前方後円墳であり、石室・石棺や埴輪などの埋設が確認されている¹³⁾ ことと考え合わせ、完成してはじめて墳墓として機能し埋葬されたのではないかという前提に立つなら、未完成はあり得ないのではないだろうか。古墳の造成中に埋葬対象者が薨去したとしても、時の権力象徴としての最大の大型前方後円墳であるだけに、その後に完成させて葬送の儀礼が改めておこなわれたとみるのが妥当で、未完成説は一般論としても考えにくい。それに『堺鏡』に記された尾州分担分の残築なら、その箇所のみ未完成としてみられねばならないが、前方部の整った段築成の部分も、文久の修陵以降、明治期の改修工事によったことが確認されており¹⁴⁾、崩形部分は後円部の東・西部面の一部を除いて、ほぼ全面にわたっていたものと考えられる〔第2図〕。大山古墳が築造された位置は、土地条件から段丘崖上の最も高所の土地を利用したものと考えられることから、これが自然地形の状態であるなら、いくらこの地域一帯の地形が著しく改変されたとしても、大山古墳周辺一帯の地形型と、大山古墳墳丘部での地形型では、あまりにも大きな違和が感じられるのである〔第1図〕。

(b) 城塞築造説について

城塞築造説については、ふれてきたように大内義弘が応永の乱（応永6年（1399））で足利幕府と交戦した「堺城」をあてる見方がある¹⁵⁾。前方後円墳墳丘部の城塞は、羽曳野市と松原市の境界部に位置する河内大塚山古墳の丹下城¹⁶⁾、藤井寺市の津堂城山古墳での小山城¹⁷⁾ など、この近辺でも多くの事例があげられる。しかし「堺城」については、井上正雄が『大阪府全志 一巻之五一』で、大字中筋に位置する堺中学校（現大阪府立三国丘高等学校、堺市堺区南三国ヶ丘町）周辺が城山と呼ばれ、城の西・城の東という字地があり、近年（同書大正11年（1922）発行）まで大内義弘戦死の碑が建てられ、「義弘の築きし城址ならん」との説を記し、さらに山名氏清の「泉府」も同所にあったと推測している¹⁸⁾。大山古墳墳丘部での中世城塞の築造説は、いずれも想像の範疇にとどまり根拠をもって検討されていないだけに、「堺城」にしても中世自治都市堺に隣接する段丘崖上の、この城山に比定した方がより適った解釈といえよう。

(c) 外的営力による自然崩壊説について

大山古墳墳丘部崩形について最も納得のいく論証は、寒川が展開する地滑り跡の見解であ



る¹⁹⁾〔後掲2. (2)〕。しかし、これにしても大山古墳の「陵墓地形図：二千分之一図」を詳察すれば、地滑り跡のみで説明することのできない、幾つかの地形型を確認することができる。大山古墳墳丘部の基本的な崩形は、いずれも上方斜面の表面が滑った小規模な表層地滑りで、比較的緩やかに下方に移動している。ところが地滑り面の随所に、表層地滑りではできにくい不自然な等高線の高くなった20ヶ所近くもの突地地形と、それに前方部の東・西側斜面で南から北方向、そして北から南方向に傾斜する開析地をはじめ30ヶ所余りの谷地形がみられる〔第2図〕。なかでも、墳丘前方部東西面、特に西側斜面のところに明瞭な谷筋がみられることについては、寒川もその地形型に若干の疑念を抱いているものの、その論拠を推考するまでには至っていない。大山古墳墳丘部で形成された地滑り面は、あまりにも複雑な地形型を呈しているといえる。

(3) 動機と研究方法

以上のような経緯のなかで大山古墳墳丘部の崩形について、実証的にとらえたのは寒川の地滑り跡の見解のみで、それもあり疑念を呈した結論になっている〔前掲1. (2) (c)、後掲2. (2)〕。天皇陵であるため発掘関連の考古資料は乏しく、それとともに崩形に対しての史資料がみられないだけに、考古学や文献史学からの分析には限界がみられ、これまでの研究の多くは表面的な想起の範疇にとどまっていた。崩形の状況を示し、その見方を提起したことについては評価されるが、類推する関連史資料の引用すらないなかでの見解になっているきがみられる。

筆者は、かねてより大山古墳の周濠池である大仙陵池の水利機能について、若干の研究を重ねてきた²⁰⁾。大山古墳は段丘崖上の微高地に立地するため〔第1図〕、集水条件に恵まれず貯留しても用水の反復利用を期待することはできず、灌漑用水池としての機能は開析地に立地する周辺の溜池群と比べ、劣悪な条件下におかれていた²¹⁾。こういった考証のなかで間接史資料として、大仙陵池の底渌えに関わった「尾張衆黒鉄者」の記事が記載された、「老圃歴史」の文書〔後掲3. (2)、後掲4. (2)、注記31)〕を知見することとなった。

さまざまな歴史事象の空間構造は、空間過程によって複合・変化しているため、一つの要素が変化すれば、その変化による作用が他の要素に波及することを前提として成り立っている。こういった視点に立つことにより、文献の乏しい研究対象であっても、地形環境をとらえることにより、最も近い事象や時代の類接する史資料をそれに照写して、空間過程の歴史景観の復原研究を対象とする歴史地理学的手法によって、追考することが可能となる²²⁾。

本稿では、大山古墳墳丘部の地形の特徴を分析することによって、間接史資料の検索から大山古墳墳丘部の崩形と結びつく共通項を抽出して、推考する方法をとった。その手はじめとして、①「陵墓地形図：二千分之一図」によって、大山古墳墳丘部の崩形について、微地形の抽出とその特徴を把握する。検証方法として、②誉田御廟山古墳墳丘部崩形の原因を、誉田断層の断層活動として分析した研究が確証として位置づけられているため、これと比較して、唯一の実証的研究である寒川の成果を援用し、大山古墳墳丘部の崩形の地滑り面の特徴を分析する。そして、③墳丘部に開析地の地形がみられることから、谷筋に付せられた「尾張谷」の名称と

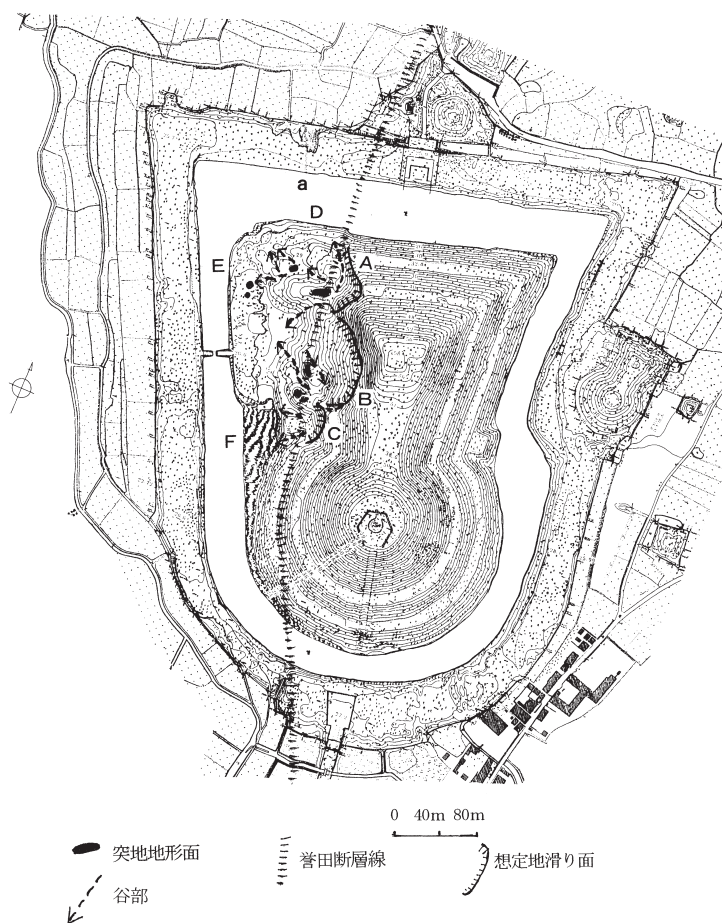
ともに灌漑水利との相関関係について検討を試みる。大山古墳墳丘部の崩形を示した「陵墓地形図：二千分之一図」は、地形を詳細に描写する唯一の貴重な資料であり、この分析によって研究の糸口がみいだせる。上記①②③の考察をふまえて、④大仙陵池に関連する記事が散見される「老圃歴史」の文書に記載の「尾張衆黒鯨者」の動向に着目し、大仙陵池に関わった背景を考察する。間接史資料の引用であることから、さまざまな課題が付随してくるため、さらに③との関連のなかで、⑤それらを整理するとともに、周辺地域をはじめ各地での「尾張衆黒鯨者」の動向から、「尾張谷」との整合性とその背景を探る。そしてこれらの推考の前提として、溜池築堤・補修、河川堤防工事、砂防工事、道路工事、新田開発、山を切り崩し畝増しなどの改修工事に関わってきた尾張国からの出稼ぎの水利土木技術集団という観点から、「尾張衆黒鯨者」と「尾張谷」をキーワードの核として位置づけ、大山古墳墳丘部崩形に対する私見を提起するものである。

2. 墳丘部地滑り面の検証

(1) 誉田御廟山古墳墳丘部地滑り面

地滑りは、斜面の一部あるいは全面的にわたって上方の重力が、下方に移動する現象で、その要因として降雨、融雪による地下水の上昇や地震・火山活動による斜面形状の変化、あるいは人為的な改変などをきっかけに、斜面上の物質が不安定化して発生するとされる²³⁾。誉田御廟山古墳の「陵墓地形図：二千分之一図」によると、北西端が大きく崩形し、周濠へ滑落している状況がとらえられる。その崩落面は、誉田御廟山古墳が位置する国府台地の段丘崖下の南北を走る、誉田断層線とほぼ一致していることが読みとれる〔第3図〕。日下、寒川は、こういった誉田御廟山古墳墳丘部北西端の崩形について、その主な原因は構造運動に求められることをとらえ、誉田御廟山古墳周辺の地形を緻密に検証し、不等沈下説を展開してきた〔前掲1. (1) (b)〕。日下は誉田御廟山古墳墳丘部北西端の崩形部分は、構造線の活動によって地震が発生し、墳丘の一部が崩落したことと同時に、『続日本紀』や『扶桑略記』の山陵震動の記事から、奈良時代から平安時代後期に至る数百年間の、何回かの地震によって崩壊したのではないかと考察する²⁴⁾。寒川は、『多聞院日記』や『古文書類纂』などに記載されている永正7年(1510)の「摂津河内地震」をあげ、誉田断層を含む生駒活断層系の断層活動によって、誉田御廟山古墳墳丘部の変形をもたらしたと推考している²⁵⁾。これらは考古学・文献史学ではなし得なかった、日下の歴史地理学の自然地理的手法による地形環境復原研究、寒川の地震考古学という新しい学問の領域に発展させた活断層研究の成果であるといえる。

誉田断層線が走る東側の前方部の一部を席捲して、北西方向に3ヶ所にわたって地滑りした跡が確認できる〔第3図A・B・C〕。特に中央のところの第3図B面の崩落は、前方部の等高線56mのところから、最下層の等高線25mの位置まで落ち込み、土塊が崩壊した深層地滑りの様相を示す。そしてA面をも含め、その滑落土は周濠池に大きく落ち込んでおり、墳丘部と周濠池と接する部分は直線化されているため〔第3図D・E〕、外堤と周濠池の整備に併せて、その後に補修の手が加えられたものと断定できる²⁶⁾。西の造りだし部分と接する周濠池のところが埋め立てられ、この部面も直線化されていることから〔第3図F〕、周濠池に落ち込



第3図 誉田御廟山古墳地形図

資料：旧宮内省帝室林野局作成「陵墓地形図：二千分之一図」、1926．〔末永雅雄『古墳の航空大観』学生社、1975、掲載図〕、国土地理院1:25000都市圏活断層図大阪東南部、1996．をもとに作成。

注）各記号については本文を参照。

んだ土砂を浚渫して、同様に整備された様子が推測される。誉田御廟山古墳墳丘部崩形跡の開析地は、地滑り面が複合する間の狭隘部のところと、そして崩落した直下面の方向にみられることから、雨水などの浸食によって、幾つかの谷筋が形成されていったものと考えられる。しかし、8ヶ所程度の不自然な突地地形の部分の確認されることから、幾つかの谷筋に造作の手を加え、開析地がより明瞭に形づくられ、その時の捨土が盛土されたものとも類推される。

（2）大山古墳墳丘部地滑り面

大山古墳墳丘部崩形について、ふれてきたように寒川は第2図A・B・C・D・Eの5ヶ所の地滑りの崩落面をあげている〔前掲1．（1）（b）〕。E面は大山古墳墳丘部前方部前面の整った頂部の北西斜面にあたることから、これを除く4ヶ所が明確な地滑り面として確認できる。

後円部のところの第2図A面は、頂部に近い部面から北北東方向に崩れ、崩落崖の高低差は6～7m程度、等高線40mの位置まで最大長約60mにわたって滑り、さらに下層部にまでその重力が及んでいる。B面もA面と同程度の規模であるが、崩落の重圧は下層部までに及ばず、後円部西南側中層部のところでとどまっている。C面は前方部等高線40mの位置のところ、南北250m近くにわたって北北西方向に、D面は前方部東南東側へ、いずれも滑った様相を呈

している。誉田御廟山古墳北西端の崩れは、深層部までに及んでいるが、大山古墳のこれら4ヶ所は表層地滑りを起こしたものとみられる。周濠池と接する第2図F・G・H・Iのところは、地滑りの面が下層部まで重圧がかかって張り出し、周濠池に若干落ち込んだものの、墳丘部周囲の形は全体的に均整がとれている。これについては、大山古墳では周濠に滑落した部分が小規模であったため、前方部前面の整った段築成と同様に、その整形が文久の修陵以降に修復されたという見方が考えられる。

4ヶ所の地滑り面のなかで、特に注視しなければならないのはC面である。下層部への重圧がかかった方向とは逆に、南北に走った明瞭な谷筋がみられる。その顕著なものは、流下方向が逆の第2図aとbで、C面のなかで第二次、さらに第三次の地滑りが生じ、その時の崩落崖がこういった南北の谷筋として形成されたのであろうか。大山古墳墳丘部の地滑りは、いずれも表層地滑りであり、その規模からみて内部地滑りが何度も生じたとは考えにくい。さらにC面で7ヶ所もの突地地形が確認できる。地滑り現象では、上方からの滑り面が止まる下方のところで、盛り上り面がみられるものの、大山古墳墳丘部の地滑りの規模からみて、それを原因と想定できる堆積は、B面の中層部でとどまった第2図アのところの突地地形ぐらいである。こういったことから、C面での7ヶ所もの突地地形の形成は、重圧の方向と異なる流下方向が逆の谷筋の存在とともに〔第2図a・b〕、明らかに不自然な様相を示しているのである。

3. 周濠池の水利機能からの提起

(1) 誉田御廟山古墳周濠池の集水と甲斐谷

誉田御廟山古墳墳丘部北西端の崩形した谷部の一つが、「甲斐谷」と呼称²⁷⁾されていたことに注目したい。誉田御廟山古墳墳丘部北西端の崩形部について、幾つかの明瞭な谷筋がみられること、その一つが「甲斐谷」と呼ばれていること、さらに日下、寒川の構造運動を主因とする自然崩壊説とを相関させるなら、次のような解釈を提起することができるのではないだろうか。それは地震によって地盤の軟弱な盛土の部分の崩壊がみられ、後世においてその崩落した部分を掘削し、その残土を盛り上げたところが突地地形として形成され、開析地がより明瞭となり主要谷筋が「甲斐谷」と呼ばれるようになった。地震で崩れていた墳丘部北西端の土地を掘削することにより、灌漑用水としての役割を果たしていた周濠池（誉田陵池）への、雨水による集水・貯水機能を増幅させることにつながったものと考えられる。誉田陵池の濠水は、旱魃時の灌漑用水として沢田村・古室村・林村（藤井寺市）の権利下にあり、濠の北外堤の西寄りに位置する樋〔第3図a〕より大水川へ流下させている。都市化による農地の転用が著しいことから、灌漑用水の需要が減少し、樋抜きされる機会を喪失したが、今も王水樋水利組合の管理下におかれている²⁸⁾。

誉田御廟山古墳墳丘部の崩形は、段丘面から氾濫原に及んで位置した墳丘部の、活断層が走る北西端の一端のところが崩落したこと、そして水利の面では、誉田陵池と関係する沢田村・古室村・林村の大水川用水が乏しくなった旱魃時に利水されたことから、地震を原因とする地滑り現象によって崩れた部面に、集水を促すために甲斐からの土木技術者によって、谷部をさらに掘削して、その一つが「甲斐谷」と呼ばれるようになったと考えたい。

(2) 大仙陵池の集水と尾張谷

大山古墳の周濠は、灌漑用水供給の機能をもつ大仙陵池として利用されてきた。堺廻り四ヶ村の舳松村・中筋村・北之庄村・湊村（堺市堺区）の117町歩余りを灌漑し、その機能については喜多村俊夫の研究に詳述される²⁹⁾。筆者は既にふれてきたように、狭山池〔第1図E〕用水を大仙陵池へ導水した経路を復原し、その灌漑機能を考察してきた〔前掲1. (3)、注記20)〕。大仙陵池は立地する土地条件から極めて集水に恵まれず、年によっては3月になっても満水に達せず、それだけに幾多の困難な事情を克服して、集水・貯水に努めねばならなかった³⁰⁾。中筋村庄屋（舳松村兼帯庄屋）であった南家の「老圃歴史」の文書³¹⁾から、相当の犠牲を払って狭山池用水の導水を企図した状況がうかがえる。狭山池に溜まり余って除け川へ捨てる水を、狭山池懸かりが不用の間に大仙陵池に導水しようとし、導水溝筋の諸村の利害を調整し、莫大な費用と労務をかけねばならなかった。水利の困難な事情は、百舌鳥古墳群の他の周濠池とも共通する課題であったが、多くの水懸かりを抱え規模が大きい大仙陵池が、最も集水の不利な条件下におかれていた³²⁾。

こういった水利事情のなかで、水利土木技術集団である「尾張衆黒鍬者」が、灌漑用水池としての機能が著しく低い大仙陵池の浚渫に従事した記録〔第1表〕と、さらに『堺鏡』に記された「尾張谷」をはじめ、48谷があったとされる³³⁾ことの、関連の共通項として、大仙陵池の集水・貯水を促すために「尾張衆黒鍬者」が谷筋の掘削を先導することによって、大山古墳墳丘部の崩壊に関わってきたのではないかという仮説を立てることが可能となる〔後掲4. (2)、後掲5.〕。そして、谷部造出にともなう残土を盛り上げたところが、突地地形として形成されたという見方が想定される。墳丘部を掘削し開析地を造出することによって法面が増加し、降雨時の集水を促進し、一時に貯水量をたかめる効果につながったものとみられる。

以上のような観点に立つなら、大山古墳墳丘部の崩形について、表層地滑りによって崩れた地形に、大仙陵池の集水・貯水の機能増幅を目的に、中筋村・舳松村をはじめとする堺廻りの村落が、「尾張衆黒鍬者」の水利土木技術集団に委託し、その指役のもと墳丘部の谷部の掘削を進行させ、崩形させた人為説が主因であるとみなしたい。寒川が検証した地滑りによる自然崩壊説を前提として、そこに人為による修復の手が大きく加えられなければ、このような地形型にならなかったものと考えられる。「尾張谷」をはじめとする谷筋の、大仙陵池への集水・貯水機能を考察することによって、これが大山古墳墳丘部崩形の要因を探る視点として提示され、さらに誉田御廟山古墳崩形部の谷筋である「甲斐谷」との、共通性を推考することができる。

4. 尾張衆黒鍬者の動向

(1) 尾張知多郡の黒鍬稼ぎ

「尾張衆黒鍬者」の動向について、若干の考察を加えておきたい。黒鍬者について、「戦国時代に築城・道路などの普請や、戦場の死体収容にあたった軽輩。江戸時代には、江戸城内の城番・作事・防火などに従事。組・組頭の編成をもち作事奉行の支配に属した。身分は低く苗字帯刀を許されなかった」とある³⁴⁾。幕制の下部組織に位置づけられ、警備・運搬、濠の補修など、城内の土木関連の作事に携わった階級の者の総称として、黒鍬と呼ばれていたことがとら

えられる。これとは別に、一般の土工に従事する黒鋤者があった。大蔵永常の『農具便利論』『諸国鋤之図』に「尾張国知多郡より諸国へ土普請働に出るもの、此のくわを用る也。此鋤を黒くわと云。また働の人をさして黒くわとよべり。藪をほりうがつにハ、竹の根木の根をきるに豆腐をきるごとく、至てむぞうさ也。池など新たニ掘るにハ他のくわ三挺の働出来る也。鋤の目かたに寄ず、つかひなるれば、小くわより勞すくなきもの也。土普請にハかならず用ゆべし」と記載される³⁵⁾。

尾張知多半島は丘陵地の地形型に規制され、いずれの河川とも短流で水量に乏しく、農業用水の供給を溜池に依存し、その築造の工法が工夫されることにより、高い水利土木技術を駆使して、一人の鋤頭が数人～数十人の鋤子を率いて各地へ出稼ぎにでかけ、溜池築堤・補修、河川堤防工事、砂防工事、道路工事、新田開発、山を切り崩し畝増し、などの労務に従事している³⁶⁾。知多半島の近辺では、木曾三川の下流域を中心に広く新田干拓地が展開し、これに従事することによって、水利土木技術の向上により磨きがかかったものとみられる。寛永7年(1630)に尾張藩が、他国に日雇にでることを禁止したが、耕地の少ない知多半島では、届出制で公認の形をとりながらも、半ば黙認されていたようである³⁷⁾。

都築敏人は、知多半島の「尾張衆黒鋤者」に関する史資料を集約している³⁸⁾。それによると、寛政元年(1789)頃と推定される『知多郡の記』に、出稼ぎにでている村は、郡中141ヶ村のうち、96ヶ村にのぼることが紹介されている³⁹⁾。さらに文政5年(1822)の『尾張徇行記』⁴⁰⁾に、知多郡内の102ヶ村の村況が記され、そのうち黒鋤稼ぎに出かけているのは48ヶ村にのぼる。出稼ぎ地についてはほとんど記述されていないが、大谷村(常滑市)では河内あたりに雇われていることがふれられている⁴¹⁾。

(2) 大仙陵池と尾張衆黒鋤者

大山古墳と「尾張衆黒鋤者」の関わりは、大仙陵池を介して「老圃歴史」に記載され、それらの主な内容は、第1表のようにまとめられる。これによって「尾張衆黒鋤者」の労務内容を見るなら、大仙陵池にとどまらず、堺港にあたるとみられる石堤内の船入場の補修のために、普請浚上土砂取除手伝に関わり、町中の労働者がこの砂運びに従事していることがわかる〔第1表(12)〕。さらに、城ヶ池の樋の取替え〔第1表(5)〕、今池の堤を九〇間、増々池の西堤長三十間余・南堤長四十四間余、幅三尺、深さ三尺余にわたって、刃金土砂入の工事が施されている〔第1表(9)・(11)〕。刃金土砂入れは粘土の注入により漏水を防止し、堤を堅固にするための「尾張衆黒鋤者」が蓄積してきた高度な水利土木技術で、舩松村・中筋村の水利施設整備全般の先導的役割を担っていた様子が読みとれる。隣村の高田村(百舌鳥、堺市北区)の御廟池(百舌鳥御廟山古墳周濠池)〔第1図B〕の浚渫作業に、「尾張衆黒鋤者」を斡旋しており〔第1表(13)〕、舩松村・中筋村では長年にわたって密接な関わりがあったことが推察される。

大仙陵池への「尾張衆黒鋤者」の水利土木の作業は、明和7年(1770)と寛政元年(1789)に記述の中池と南池を、大山古墳の墳丘部を取り巻く周濠池の部位をさした名称とみなして、それを含めた浚渫に携わった記録が8回にのぼる〔第1表(2)・(3)・(4)・(6)・(7)・(8)・(10)・(15)〕。近世での大仙陵池の池数は約17.48町歩に及び⁴²⁾、その広大な面積に比して、立地する土地条

第1表 「老圃歴史」にみる大仙陵池関連での尾張衆黒鉄者の動向

年号（西暦）	記 事	備 考
(1) 宝暦6年(1756)	山田山ノ東淵四間ニ八間本坪三十坪二分三内古淵六坪引廿四坪余、代銀百拾五匁尾張黒鉄詔普請、尾張下村より来り此辺始	大山古墳北方の段丘部に位置した淵か、尾張詔記載
(2) 明和7年(1770)	中池床内八百十九坪、深平均一尺三寸余浚掘代五百五拾式匁四分式厘、尾張黒鉄幸右衛門詔普請九月出来、去年より願上、御手当米八石被下候	大仙陵池内の中池か、尾張詔記載
(3) 安永7年(1778)	大仙陵池浚二月廿五日始、北池掛り口十一間、又樋ヨリ四十六間除、北長百四十四間・幅八間極三月七日迄樋より四十三間除、南長百四十八間折廻東江十一間、尾張詔掘代銀五百式拾目式分六り、右同直段、浚場長三百五十三間・幅八間、以下不同有	大仙陵池、尾張詔記載
(4) 安永9年(1780)	(十二月)大仙陵北池浚残百二十六間、尾張詔式百九拾三匁余、丑六月迄ニ済	大仙陵池、尾張詔記載
(5) 天明元年(1781)	(六月)城ヶ池樋取替 地代并尾張人足賃共合銀壹貫五百八拾六匁三分八厘	城ヶ池樋取替、尾張人足賃払い
(6) 天明元年(1781)	(十二月)大仙陵池南掛り口より西江五十四間浚、尾張詔式百拾七匁三分、壹尺掘三分五厘	大仙陵池、尾張詔記載
(7) 寛政元年(1789)	(六月)大仙陵除普請一(中略)一除筋堤下迄崩、依之、池中より持込凡五十間余匁倍落芝植、尾張多四郎詔普請廿八日出来立、南新開江笠置堤形三十余間成	大仙陵池、尾張詔記載
(8) 寛政元年(1789)	(八月)長山池樋伏替、東より南池浚え、御番所断済、尾張普請	大仙陵池内の南池か、尾張普請記載
(9) 寛政6年(1794)	(三月)今池ウテ樋ヨリ東江九十間、堤江刃金土砂入ル、水持よろし	堤刃金土砂入れ技術
(10) 寛政6年(1794)	(九月)大仙陵池樋前水尾掘成、但中嶋之間内池口幅四間・樋前幅六間・長廿七間・深三尺余、尾張人足詔掘代銀百八拾目渡、普請中日覆村方より建、山方下役始終出勤、村方より差構ヒ不申事	大仙陵池、尾張詔記載
(11) 寛政6年(1794)	(十二月)増々池西堤長三十間余・南堤長四十四間余、幅三尺ニ深さ三尺余はかね入成ル、尾張人足江詔普請、土砂池中より掘出ス、并除溝普請共	堤刃金入れ技術、尾張詔記載
(12) 寛政7年(1795)	(五月)石堤内船入場、尾張黒鉄普請浚上土砂取除手伝、町中老若男女共日々砂運び夥しい	堺港・土居川関連の修築か、尾張普請記載
(13) 寛政7年(1795)	(七月)高田村使御廟池浚普請被仰付候間、壹人三尺掘壹坪宛、尤追而御扶持五合ツ、被下候由、八月二日関合ニ遣候所、詔掘も致世話候様申来	御廟山古墳周濠池の詔掘の世話、尾張詔か
(14) 寛政7年(1795)	(八月)高田村御廟池浚普請被仰付候由、反割申来り、庄屋喜作へ詔普請頼遣ス、人足三拾四人代銀六拾壹匁式分十五日喜作へ遣ス、請取書帳袋ニ有、但扶持米不渡	上記(13)関連での、人足賃払い
(15) 寛政10年(1798)	(九月)大仙陵懸り溝底掘、尾張黒鉄詔	大仙陵池関連、尾張詔記載
(16) 文化3年(1806)	(八月)大仙陵中嶋松枝伐透し、雑木伐取共凡二千駄入札	墳丘部松伐採
(17) 文化6年(1809)	(五月)屋敷東溝浚、尾張	土居川東溝、尾張詔か
(18) 文化6年(1809)	(三月)大仙池懸ヶ溝底掘黒土迄五百四十八間、畦鉄助間壹匁式分引請	大仙陵池への黒土村迄の集水井路、畦鉄引請

資料：1. 森杉夫翻刻「老圃歴史（上）・（二）・（三）・（四）・（五）」、『堺研究9～13号』所収、堺市立図書館、1975～1982. より関連記事を抜粋。

件は段丘崖上に位置するため、灌漑用水の集水・貯水を図るには、より専門的な技術をもって浚渫をおこなう必要があったのであろう。安永7年（1778）の大仙陵池の北池掛りの浚えは二度にわたっており、最初の段階では10日余りの作業で、尾張訃として掘代銀五百貳拾匁貳分六厘が支払われている〔第1表(3)〕。一日の賃代を一人当たり二匁八匁として⁴³⁾、20人前後の尾張下村⁴⁴⁾〔第1表(1)〕からの土木技術集団が関わったことになる。大仙陵池での浚渫作業の掘代銀は、百八拾匁〔第1表(10)〕から五百五拾貳匁余り〔第1表(2)〕であり、比較的短期間のうちに完了していることから、難しい作業を「尾張衆黒鋤者」が請け負い、その指役のもと日常的には舩松村・中筋村をはじめ、堺廻り四ヶ村に課せられた労務作業によって、浚渫作業がなされたものとみられる。

1972年に実施された宮内庁の事務所改築にともなう発掘調査で、第二堤（中堤）の地表下1.4mのところより円筒埴輪片とともに近世陶磁器が出土し、この期にそこを盛土したことがとらえられている⁴⁵⁾。「尾張衆黒鋤者」が堺廻り四ヶ村の農民を動員して、大仙陵池底の浚渫に関わり、その時に出土した土砂を盛土している姿が思い浮かんでくるのである。こういった大仙陵池の底浚えとともに、さらなる集水・貯水を促すため、大山古墳の墳丘部の掘削に「尾張衆黒鋤者」を誘引させていったものと考えたい。

大山古墳西側にあたる堺廻り四ヶ村の水懸かりへは、主に樋の谷〔第1図D、第2図J〕をはじめとする、西の周濠池に設置された樋より灌漑されたことから、墳丘部西側の谷地形の形成が顕著であり、灌漑用水の貯水・集水のために、この部面の墳丘部の掘削を著しく進行させていったものとも推察される〔第2図〕。それに近世の大山古墳墳丘部面の姿態は、樹木が比較的疎らな景観⁴⁶⁾であることから、谷部を雨水が一気に流下して貯水されたことが想起できるのである。

『農具便利論』に、泉州堺にて製造の「農具直段附」が掲載されている。そのなかで、「大黒鋤 但し尾州智多郡二用 代十五、六匁」・「小黒鋤 同断 代十匁位」とある⁴⁷⁾。これも大仙陵池をはじめとして、出稼ぎにきた「尾張衆黒鋤者」が、注文に関わっていたものとみなされる。

（3）周辺地域での尾張衆黒鋤者と土木技術の伝播

「尾張衆黒鋤者」の動向は、大仙陵池のみにみられるものではない。市川秀之は民俗学に立脚して、本稿で課題とした大仙陵池をはじめ、狭山池周辺から河内・和泉を中心に、「尾張衆黒鋤者」の全体の動向をまとめている⁴⁸⁾。このなかで、狭山池周辺での三都村（大阪狭山市）や菅生村（堺市美原区）の地名が表出する「オワレ唄」を紹介している⁴⁹⁾。新家村（泉南市）の土木作業時に唄う「かけや節」は、大阪民謡百選に選ばれ、古老達によって再現、放映されている⁵⁰⁾。これらは「地搗唄」として、広く河内・和泉で堤などの地搗時のかけ声として唄われてきた。

市川は、さらに近世の狭山池をめぐる、数多くの改修に関わった商人と職人の側面から検討を加えている⁵¹⁾。狭山池の池守を勤めた田中家の文書を精査するなかで、延享5年（1748）の狭山池工事につき、「尾張もの」が訪れ工事の費用・手段を見積もったことがとらえられている。この時は工事も実施されず不調に終わっているが、天明7年（1787）に尾張清三郎・為

右衛門が西樋部分掘削工事を、翌年に尾張弥助・清三郎が堤普請を落札している⁵²⁾。狭山池での「尾張衆黒鍬者」が関わった実態については、これまで具体的にまとめられたものはなかっただけに、労務の側面から独創的な興味ある論を展開している。狭山池周辺の事例として、寛政5年(1793)に三宅村(松原市)の馬場池浚えと刃金入れを尾張甚吉が請け負い⁵³⁾、寛政12年(1800)頃、山田村(南河内郡太子町)で池普請に携わり定住していた尾張彦三郎が、貧困のため知多郡へ帰村したことにふれている⁵⁴⁾。

尾張坂町(大阪市中心部)、長町尾張坂町(大阪府浪速区)の地名⁵⁵⁾から、上町台地に連なる坂道の土木作業に関わった「尾張衆黒鍬者」の存在を髣髴させる。その他、文化7年(1810)に忠岡村(泉北郡忠岡町)での三の坪池の新造に、尾州兵次郎以下3名の黒鍬者が請け負い⁵⁶⁾、久米田池では、日常的に管理・点検に関わっていた黒鍬者の動向を知ることができる⁵⁷⁾。

弘化2年(1845)に、海会宮池の補修に市場村・樽井村(泉南市)に住む尾張職の喜代蔵・安蔵の雇用⁵⁸⁾、滝畑村(河内長野市)の開墾で、善正村(和泉市)や日野村(河内長野市)よりクロクワシを雇った記録⁵⁹⁾、久米田池周辺の新在家村(岸和田市)や福田村(岸和田市)での、黒鍬者の定住⁶⁰⁾などの事例のように、「尾張衆黒鍬者」のなかには出稼ぎ期限を過ぎても帰村しない者や、土木または日雇労働者として出先に定住する者がみられるようになる。黒鍬者が定住するとともに、これらによってもたらされた水利土木技術が各地に伝播し、広範に展開することとなる。大仙陵池の南東に位置する東村(百舌鳥、堺市北区)には但馬池、金口村(百舌鳥、堺市北区)には信濃池、と呼称される溜池がみられる。これらは但馬、信濃からの出稼ぎの土木技術集団の指役によって、築造されたという見方に結びつけることができる。

「尾張衆黒鍬者」の労務は、溜池の築造・補修だけでなく、石垣を組む新田の畝増しに従事し、各地で重宝されたものの、身分的には厚遇されたものではなかった。それだけに表立って登場することはないが、かなり各地に広範囲にわたって活躍した足跡がみられる。黒鍬の呼称は各地に残され、「埼玉県秩父、長野県、神奈川県、愛知県三河、滋賀県、兵庫県但馬、徳島県那賀郡などの諸地方では土木作業者を、富山市周辺、徳島県麻植郡などでは石垣作業者をクロクワと呼び、佐渡ではクロクワは土方の用いる鍬の名とし、徳島県では、柄が短く角度が鋭くて堅い土を掘起すのに使う鍬を久六鍬と呼ばれている」ことが記されている⁶¹⁾。これらのように、「尾張衆黒鍬者」に起因する土木技術が、さまざまな形で各地に伝播し、在地系の黒鍬者の台頭とともに、他国からの出稼ぎ黒鍬との確執がみられるようになっている⁶²⁾。

5. 尾張衆黒鍬者と尾張谷の関連の課題

「老圃歴史」記載の大仙陵池底浚史料での「尾張衆黒鍬者」の動向を分析するなかで、『堺鏡』記載の尾張谷との相関を想定し検討してきた。こういった間接史資料から推考することは、展開のうえで幾つかの課題が想起される。

その一つとしてまず、「老圃歴史」での「尾張衆黒鍬者」の出典史料の年代と、『堺鑑』での「尾張谷」と呼称された表出年代が乖違していることにふれておかねばなるまい。「老圃歴史」の黒鍬者関連の記事は、宝暦6年(1756)が初見で〔第1表(1)〕、大仙陵池底浚えの初見は明和7年(1770)〔第1表(2)〕である。『堺鑑』の刊行は貞享元年(1684年)であるため、およそ

表出年代に70～80年の違いがみられる。

河内・和泉を中心とした周辺地域での「尾張衆黒鍬者」の動向の記事についても、1700・1800年代のものが中心であった〔前掲4.（3）〕。しかし、寛永7年（1630）に尾張藩が農民の他国へ日雇に出る事を禁止し、知多半島の黒鍬者については、届け制で公認の形をとりながらも、黙認の状況であることをはじめとして〔前掲4.（1）、注記36〕、天和2年（1682）に三河田原藩の安原新田の復旧に、尾州知多郡岩滑村の森与次兵衛と同源左衛門が普請に関わっている⁶³⁾。河内・和泉・摂津での黒鍬関連は、明暦元年（1655）には尾張坂町といったこと⁶⁴⁾、長町尾張坂町は元禄6年（1693）に長町七丁目と改称していること⁶⁵⁾、明暦元年（1655）の大坂三郷町絵図に「おはり坂町」とあることから⁶⁶⁾、元和元年（1615）の大坂城落城以降、徳川幕府の手による大坂市中復興時には、これらの町名を付していたことが知れる。他に稲葉村の寛文3年（1663）文書に、村の娘と尾張衆との結婚のメモがみられる⁶⁷⁾。こういったことから『堺鑑』が刊行された貞享元年（1684年）より以前に、「尾張衆黒鍬者」の出稼ぎがおこなわれていたことが考えられ、大仙陵池との関わりを「老圃歴史」記載の1750年代以降に限定しなくてもよいのである。

「老圃歴史」は、中筋村庄屋の南孫太夫（生没年：元文5年（1740）～文政2年（1819））が、自家に所蔵する文禄元年（1592）から文化14年（1817）までの古文書・古記録をまとめたものである〔前掲3.（2）、前掲4.（2）、注記31〕。1700年代以降の集約が最も多く、それ以前の記事の掲載は少ないため、1600年代に「尾張衆黒鍬者」の大仙陵池への関わりがあったとしても、そのことを記した文書が残されていなかったともみなされるのではない。慶長13年（1608）に狭山池が大改修され、この期に狭山池水下地域の各地に新たな溜池が造られ、この辺り一帯の灌漑水利体系が再編・整備されている⁶⁸⁾。狭山池慶長期大改修事業に連動して、慶長17年（1612）に狭山池より下流1.5kmの西除川左岸の位置に、狭山池用水を大仙陵池へ導水のために、その中継の溜池として轟池〔第1図イ〕の築造がみられる⁶⁹⁾。さらに大山古墳の南東側にあたる夕雲開の新田開発は、寛永6年（1629）に完了している⁷⁰⁾。こういったことを鑑みるなら、1600年代初頭以降よりこの地域で水利再編・新田開発関連の土木工事が頻発し、「尾張衆黒鍬者」もこの頃には何らかの形で、大仙陵池に関わっていたと想定することに差はないであろう。

『堺鑑』での大山古墳の築造に関しての、「尾州ヨリ歩遅來故其築残ハ其儘谷トナレリ今ニ尾張谷ト云リ是俗説未考實否」という記述は、実直にそのまま表現することを避け、「尾張衆黒鍬者」が関わった事情を曖昧にし、「尾張谷」の呼称を前面にだして「築残」と転嫁したものとも思える。貞享2年（1685）に堺奉行所が後円部の埋葬施設の保存のため、大きく口を開けていた石室を覆い、周りに溝をさざみ、その外周六〇間に杉を植え込み、立ち入りを禁止している⁷¹⁾。元禄11年（1698）には、そこに竹垣を巡らせ、享保17年（1732）には、人も牛馬も乱りに立ち入ることを禁じた高札を付近の村庄屋へ下付している⁷²⁾。このように大山古墳が大仙陵として敬事され、後円部の東側中腹に勤番所を建て、堺奉行所の管理がなされはじめたのが1700年前後のことである⁷³⁾。これらの状況から、1600年代に集水・貯水を目的に「尾張衆黒鍬者」が先導して大山古墳墳丘部の谷部の掘削に関わり、それは一時に実施されたものではなく漸次

継続され、『堺鑑』に記載された大山古墳の「尾張谷」が、堺奉行所の管理がはじまる1600年代末までに造出されていたとみなしたい。それは『堺鑑』が刊行された年代とも符合し、そして、堺奉行所の管理が入った以降に、大仙陵池の底浚えに比重をおいた、1750年代以降の「老圃歴史」記載の文書が残されていたとみることも可能である。

幕府（堺奉行所）の管理が1700年初頭頃より強化されたといっても、それは後円部頂上の埋葬施設のみに注意が払われたのに過ぎず、近世期での大山古墳は、中筋村・舩松村をはじめとする周辺村落のわらび取り・しば集めの入会地で、前方部の頂部は国見山と呼ばれ、花見遊山の場として自由に出入りができ、相当荒れていた様子が記されている⁷⁴⁾。『堺鑑』で「尾張谷」のことを抽象的な表現で示したものの、「老圃歴史」に大山古墳墳丘部に掘削の手を加えたことが書き記されていないのは、相当に荒らされていたといえども、やはり最大の天皇陵の墳丘部を掘削することに、いささかの抵抗があり幕府管理の動きにも配慮したのでは、との見方を示しておきたい。

6. 他、課題（まとめに代えて）

大山古墳墳丘部の崩形について、これまでの先行研究の動向をふまえ、大仙陵池の集水・貯水を増幅させるために「尾張衆黒鉄者」の指役のもと、表層地滑り跡に雨水などによりできた開析のところを人為的に掘削して、その谷部の一つが「尾張谷」と呼ばれ、残土を盛り上げたところが突地地形として形成されたという仮説を立て、「陵墓地形図：二千分之一図」の読図、菅田御廟山古墳崩形の地滑り面との比較、「老圃歴史」記載の大仙陵池底浚史料の分析、さらに大山古墳周辺での黒鉄者関連の文書・伝承などを援用し、私見を検証してきた。

上記5. で示した出典史料の年代の乖違の他、さらに幾つかの課題が表出され、以下、その見解にふれておきたい。

①大山古墳墳丘部を掘削し、谷部を造出することによって、果たしてどれほどの集水・貯水につながったのか疑問視される。墳丘部を開析しなくとも降った雨水は、すべて大仙陵池に流入するため、全体の貯水量としては大きな変化はなかったものと思える。しかし、旱魃地帯にあたるこの地域において、日常的に井路の管理に努め、雨水をいち早く集水する水利慣行が古くよりみられてきた⁷⁵⁾。灌漑の最悪の条件下におかれてきた大仙陵池の乏しい貯水量を一気に増水すべく、集水のために谷部を掘削することは、決して無為なことではなかったといえる。

②南に位置するミサンザイ古墳（上石津陵、履中天皇陵、墳丘長＝360m）〔第1図C〕の墳丘部は整形を保っており、大山古墳と際立った違いをみせる⁷⁶⁾。両古墳とも後円部を北にして、その中間域にみられる開析地を避けるようにして段丘崖上に立地している〔第1図〕。大山古墳が位置する段丘崖上には、樋の谷〔第1図D、第2図J〕に通ずる開析した原地形のあったことが推測され、大山古墳の一部はその上に築造されているため比較的地盤の弱かった部位があったのではないか。それに墳丘部の規模が巨大であることから地震の影響を受けやすく、表層地滑りの原因になり易かったと解したい。

大仙陵池の集水井路は二つあり、一つは大山古墳後円部北辺の三濠目のところへ流入し、あと一つは北東から南西方向に流れミサンザイ古墳の周濠池である上石津陵池へ流入した井路よ

り分岐して、前方部東の三濠目の南端のところに流入していた⁷⁷⁾。それだけに集水をめぐって上石津陵池と密接な関係にあったといえる。大仙陵池の水面面積は一・二濠目のみで約17.5町歩、三濠目を含んで約25.5町歩、石津陵池の水面面積は約10町歩である⁷⁸⁾〔注記42)〕。両池とも水利に恵まれなかったものの、石津陵池の許容貯水量がはるかに小さく、墳丘部の地滑り面もみられなかったことから、あえてミサンザイ古墳墳丘部にまで手を加えて、集水・貯水を増幅する必要性はなかったであろう。

その他、③大山古墳の第三濠が新田開発されていた経緯があり〔注記42)〕、大仙陵池の水利機能の変遷が十分に把握でき得ていたのか。④夕雲開の開発とともに、大山古墳周辺部の段丘崖上は新田開発地が広く展開し〔注記70)〕、これにともなう開墾経緯との関連考察が必要ではなかったのか。⑤大仙陵池を機軸に、百舌鳥古墳群での周濠池を有する他古墳との水利面からの比較検討が要求される。⑥大山古墳にとどまらず、他の前方後円墳墳丘部崩形の事例との、原因を含めた比較考察も重要な視点である。⑦史資料が限定されているだけに、本稿で引用した既出史資料の補填として、尾張国知多郡をはじめとして、大山古墳周辺での「尾張衆黒鯨者」関連の史資料のさらなる探索と分析が求められる。

例え文献の乏しい研究対象ではあっても、地形環境を想起して、そこに間接史資料を照写することによって、新たな課題の提起とともに、推論に筋道をつけた思考が拡大する〔注記22)〕。本研究をきっかけに大山古墳墳丘部崩形について、さらなる議論が惹起されることを期待したい。

なお、大阪歴史学会考古部会個人報告での大会発表時において、大山古墳墳丘部崩形での谷部の造出は、墳丘部の崩壊を防止する治水のためではなかったかという指摘があった⁷⁹⁾。表層地滑り面の崩れからみて、治水とみる考えは有意な提言であり、付言しておくとともに、以上、幾つかの課題にふれ、それに対しての若干の見解を示し、後考の指針としたい。

本稿は、2009年度歴史地理学会大会、並びに大阪歴史学会2011年度大会：考古・個人報告で発表したものに、加筆修正してまとめたものである。報告において、貴重なご意見をいただいた学徒の方々に厚くお礼を申しあげます。

注記

- 1) 末永雅雄『古墳の航空大観』学生社、1975。掲載図による。
- 2) 網干善教「応神・仁徳陵にみる特殊状況」古代学研究90、1979。31～33頁。
- 3) 衣笠一閑『堺鑑上巻』、貞享元年（1684）《復刻版『堺鑑全』小谷城郷土館、1977。32・33頁。
- 4) 井上光貞『日本の歴史1—神話から歴史へ—』中央公論社、1973。385・386頁。

他に、城塞築造による人為説については、斎藤忠が「城砦として一部地域が利用されたことが考えられる」とふれているのがみられる（『仁徳天皇・百舌鳥耳原中陵』、『国史大辞典11』所収、吉川弘文館、1990。287・288頁）。

- 5) 森 浩一「古墳文化と古代国家の誕生：古墳築造の年代と未完成の問題」、『大阪府史—第1巻—』所収、大阪府、1978。748・749頁。

- 6) 上田宏範「仁徳陵とその築造企画の謎」堺の四季22（盛夏号）、1986. 2～17頁。第37回全国植樹祭・仁徳御陵特別参拝区域一般公開記念での講演内容のまとめ。
 - 7) 中井正弘『仁徳陵—この巨大な謎—』創元社、1992. 27～31頁、88・89頁。
 - 8) 堀田啓一『日本古代の陵墓』所収、吉川弘文館、2001. 「百舌鳥古墳群と大山古墳をめぐる：大山古墳の修築について」256・259・266頁。
 - 9) 日下雅義『歴史時代の地形環境』所収、古今書院、1980. 「石川下流域の地形環境と「応神天皇陵（誉田山）古墳」の築造に伴う地形変化」324～356頁。
初出論文：「「応神天皇陵」近傍の地形環境」考古学研究21、1975. 67～84頁。
 - 10) 日下雅義『平野は語る』所収、大巧社、1998. 「段丘と古代の開発：古墳の変形と地震」85～89頁。
 - 11) ①寒川 旭「誉田山古墳の断層変位と地震」地震第二輯39、1986. 15～24頁。
②寒川 旭『地震考古学』所収、中公新書、1992. 「大阪府の古市古墳群」87～94頁。
 - 12) 寒川 旭「大山古墳の墳丘に生じた地滑り跡」古代学研究131、1995. 30～32頁。
 - 13) 前掲7) 69～75頁。
後円主体部に巨大石室・石棺の確認、前方部中腹部で明治5年（1872）に風水害による崩土から石室・石棺・副葬品の出土がみられる。また、女性頭部埴輪など、仁徳陵及び同陵周濠・周辺とした出土事例の文献のあることがあげられているが、これらは不明確な要素が強いとみられている。確実な出土事例として、墳丘部及び内堤からは円筒埴輪・埴輪列の埋設や出土記録があることにふれる。
 - 14) 前掲7) 131～134頁。
前方部の段築成は、宮内省の陵墓監の「陵墓誌—古市部見廻区域内」の記録によって、明治20年（1887）～23年（1890）にかけて、約三万四千五百二十六坪に松・杉・檜・榎など苗木一九万二六四五本を植林した時期と重なりと推察する。
 - 15) 前掲8) 251頁。
 - 16) 『日本歴史地名体系第28巻—大阪府の地名Ⅱ—』平凡社、1986. 1088頁。
 - 17) 前掲16) 1054頁。
 - 18) 井上正雄『大阪府全志—巻之五—』清文堂出版《復刻版》、1922《復刻版1976. 297頁》。
 - 19) 前掲12) 30・31頁。
 - 20) 川内眷三『大阪平野の溜池環境—変貌の歴史と復原—』所収、和泉書院、2009. 「古墳周濠の土地条件と集水機能—大仙陵池への狭山池用水の導水をめぐって—」357～394頁。
同稿は、四天王寺国際仏教大学紀要37、2004年、掲載論文。
 - 21) 前掲20) 359～369頁。
 - 22) 本稿では、大山古墳を舞台にして墳丘部崩形と結びつく間接史資料の検索から、その共通項を抽出して推論を立てる方法をとる。文献の乏しい推論を前提とした研究対象の場合、地形図や航空写真などをもとに実地調査を重ね、関係する資料の探索とともに、自然・人文の両要素が渾然として織りなす地域の特徴を把握・説明する営みが、研究の可能性を拡大させていく。地表に残存する現在景観の歴史的分析が必要で、大山古墳がおかれてきた歴史的経緯の一端から、人々がその時々時代背景のなかで密接に関わってきた姿を、より身近に認識することにつながる。さらに現実の大山古墳の姿態を知ることにより、後世にその価値を守り育て、継承していく視点が醸成されていくものと考え。
- なお、藤岡謙二郎は、直接の資料がない場合、間接資料を応用して分析することは、歴史地理学の手法の一つとして用いられことを説き、その重要性を示唆している（藤岡謙二郎「1. 歴史地理の課題と研究 2 歴史地理学の研究法」、織田武雄編『歴史地理』所収、朝倉書店、1953. 4頁）。
- 23) 防災科学技術研究所発行の資料による。
 - 24) 前掲10) 87・88頁。

- 25) 前掲11) ②92・93頁。
- 26) 2011年2月24日に実施された誉田御廟山古墳の限定公開に際し、明治20年代に周濠に手を入れた記録があり、崩落土を前面及び側面について整形したものではないかと、案内した陵墓調査官より説明を受けている〔岸本直文「誉田御廟山古墳への立ち入り」『ヒストリア』225, 2011, 100・107頁〕。
- 27) 前掲6) 13頁。
- 28) 2008年9月、藤井寺市沢田での聞き取りによる。
- 29) 喜多村俊夫『日本灌漑水利慣行の史的研究』所収、岩波書店、1973。「泉州堺近郊の灌漑農業」528～581頁。
同稿は、東亜人文学報3—2、1943。掲載論文。
- 30) 前掲20) 372頁。
- 31) 森杉夫翻刻「老圃歴史（上）・（二）・（三）・（四）・（五）」、『堺研究9～13号』所収、堺市立図書館、1975・1978・1979・1980・1982。1～92・1～68・1～102・1～86・1～93頁。
中筋村庄屋（舩松村兼帯庄屋）南家の十一世南孫太夫が、自家に所蔵している文禄元年（1592）から文化14年（1817）までの古文書・古記録を、庄屋を退役した寛政9年（1797）以降に「老圃歴史」として集約している。この原本は第二次世界大戦の戦火を受け焼失したが、『堺市史』の編集に際し筆写されていたものが堺市立図書館に架蔵され、それをもとに翻刻したものである。堺廻りの中筋村を中心として舩松村・北之庄村の村勢・村政・土地・貢租・水利についてふれ、堺研究の貴重な近世史料として活用される。
- 32) 前掲20) 373頁。
- 33) 前掲7) 29頁。
初出は、大山古墳の管理を明治期になって委嘱された陵掌が、「四八谷と称し最大のものは尾張谷」と語っているものをまとめたものによる〔『堺市史—第7巻—』堺市、1930〕。
- 34) 『角川日本史辞典』角川書店、1974（第二版）。300頁。
- 35) 大蔵永常『農具便利論』所収、「諸国鋤之図」文政5年（1822）。〔『日本農書全集—第15巻—』農村漁村文化協会、1977。143頁〕。
- 36) 都築敏人「黒鯨人足について（一）—江戸時代の土木作業員の動向—」みなみ67（南知多郷土研究会）、1999。63頁。
- 37) 前掲36) 63頁。
- 38) 前掲36) 63～68頁の他、
都築敏人「黒鯨人足について（二）—三井家文書に見られる黒鯨関係—」みなみ68, 1999。56～62頁。
同「黒鯨人足について（三）—盛田家文書に見られる黒鯨関係・その他—」みなみ69, 2000。72～77頁。
同「黒鯨人足について（四）—田原藩日記・知多古文化研究—」みなみ71, 2001。61～64頁。
同「黒鯨人足について（五）—近世における溜池の築造技術集団—尾張衆の活動をめぐって」みなみ72号, 2001。67～71頁。
都築は、このなかで三井家文書「黒鯨人別書上帳」、盛田家文書「他国江罷出候人数之覚」、杉浦家文書「乙川村他所稼人数書上帳」などの史料を紹介している。
他に、概要を解説した範疇にとどまるが、『有脇の黒鯨』有脇公民館編、1984。杉崎章「尾張・知多の黒鯨稼」知多古文化研究4、1988。41～46頁。をあげることができる。
- 39) 前掲36) 65・66頁。
- 40) 『名古屋叢書続編八一尾張徇行記（5）—』名古屋市教育委員会、1976（復刻版1984）。
- 41) 前掲40) 363頁。

- 42) 大山古墳が三重濠に再掘削されたのは、明治32年（1899）～35年（1902）のことである。近世期での三重目の濠は、新田開発がなされ、絵図には二重濠で描かれているものがみられる〔中井正弘『伝仁徳陵と百舌鳥古墳群』摂河泉文庫、1981（第2版）、25～28頁〕。したがって、本稿での近世期の大仙陵池の池敷は、中濠と二重目を濠池の面積として算出した値による。三濠目を含めると25.5町歩となる〔前掲20〕367頁〕。
- 43) 大工の賃代は、享保11年（1726）～享保16年（1731）で二匁、延享3年（1746）で二匁八匁となっている〔山崎隆三『近世物価史研究』所収、塙書房、1983、「第17表 米価と賃金」100頁〕。久米田池での、文政9年（1826）の向堤穴潰しに付尾張五人分で一四匁（一人当たり二匁八匁）、文政13年（1830）の市右衛門作料四八人分で八四匁（一人当たり二匁八匁）である〔後掲57〕所収、「表1 文政年間の久米田池郷から黒鋤者への支払い」91頁〕。
- 44) 『尾張御行記』〔前掲40〕〕には、尾張下村に該当する村落はみられない。尾張下の村より来たという漠然的な表意であるとみられる。
- 45) 今尾文昭「天皇陵古墳解説：大山古墳」、森浩一編『天皇陵古墳』所収、大巧社、1991、385～390頁。
- 46) W. ゴーランド『日本古墳文化論』（上田宏範校注、稲本忠雄訳）所収、創元社、1981。「日本の初期天皇陵とドルメン」に掲載の写真20に、仁徳天皇陵の写真が掲載される（校注者、明治初年と記す）。それによると植栽は少なく墳丘部の輪郭が鮮明に写されている。
- 47) 前掲35) 300頁。
- 48) 市川秀之「オワリ衆の伝承を追って—近世の池溝築造技術者集団—」近畿民俗125、1991、1～16頁。
- 49) 前掲48) 2頁。

オワレ唄

ヤレサー おわれ黒鋤の コリヤ 肩の皮ほしや
 コーリヤ もろて雪駄の裏にする。
 ヤレサー おわれ黒鋤 コリヤ つんぱくろの鳥よ
 コーリヤ 國をへだて、土運ぶ。
 ヤレサー 三都狭山の コリヤ 御普請しもて
 コーリヤ 菅生の宮山唄で越す。

初出は、伊藤樂堂「南河内郡民謡雑筆」上方86、上方郷土研究会、1938、97・98頁。

- 50) 辻川季三郎『和泉、河内、摂津 水利灌溉、築造史考—技術集団の系譜—』大栄出版、1994、297・298頁。

かけや節

ヤレサー 伊勢は津でもつ、津は伊勢でもつ
 コーリヤ 尾張名古屋は城でもつ
 ヤレサー 行ったら見てこい尾張の城を
 コーリヤ 金のしゃちほこ雨ざらし
 ヤレサー 尾張さんとは名はよいけれど
 コーリヤ 朝も早よから鋤仕事
 ヤレサー とんとたたくは桶屋か大工
 コーリヤ いのて走るは魚屋か

初出は、『続新家古記の世界』泉南歴史民俗学資料社、1987。

- 51) 市川秀之「近世狭山池の改修をめぐる商人と職人」、『狭山池—論考編—』所収、狭山池調査事務所、1999、97～124頁。
- 52) 前掲51) 119頁。
- 53) 『松原市史—第3巻—』所収、松原市、1978。「弘化三年以降 ひかえ」、439頁。

- 54) 前掲48) 14頁、前掲51) 120頁。
- 55) 『角川日本地名大辞典27—大阪府—』 角川書店、1983. 278・876頁。
- 56) 『忠岡町史—第2巻—』 所収、忠岡町、1990. 「三の坪池築造請負一札」 746頁。
- 57) 畔野萌野「『久米田池水利関係資料』より、久米田池普請における黒鯨者について」 橘史学18、2003. 79～94頁。
- 58) 『泉南市史—通史編—』 所収、泉南市、1987. 「海会宮池の利用」 293～298頁。
- 59) 宮本常一編著『河内國瀧畑左近熊太翁舊事談』 アチックミュージアム、1938. 111頁。
- 60) 前掲57) 82頁。
- 61) 民俗学研究会編『改定総合日本民俗語彙集—第2巻—』 平凡社、1970. 141頁。
- 62) 前掲51) 120頁。

安政6年(1859)、富田林市東板持石田家文書、で他国からの出稼ぎ黒鯨者に対抗するため、摂津・河内の在地系黒鯨者が結集する動きがとらえられている。
- 63) 西田真樹「三河・田原藩政に映じた尾張および尾張藩」 桜花学園大学紀要2、2000. 25～51頁。
- 64) 『日本歴史地名体系第28巻・大阪府の地名I』 平凡社、1986. 496頁。
- 65)・66) 前掲64) 697頁。
- 67) 前掲50)、307頁。
- 68) 慶長13年(1608)の狭山池慶長期大改修事業については、『狭山池改修誌』 大阪府、1931. 207～213頁。

をはじめ、多くの文献にみることができる。
- 69) 前掲31)「老圃歴史(上)」 20・21頁。
- 70) 夕雲開は、幕府代官高西夕雲の名に因むもので、ミサンザイ古墳東側から大山古墳の南東側にかけて飛地状に展開し、寛永6年(1629)に新田開発を完了している〔前掲(55) 669頁〕。大山古墳の位置する段丘崖上は、夕雲開だけでなく、畑地主体の新田開発の土地が広がる。堺廻り三ヶ村(中筋村・舩松村・中之庄村)の耕地荒廃の状況を考察した牧野信之助の研究があげられる〔牧野信之助『土地及び聚落史上の諸問題』 所収、河出書房、1938. 「近世の耕地荒廃と小作問題—堺廻り三ヶ村の手余り地に関する研究—」 383～427頁〕。
- 71)・72) 前掲7) 98・99頁。
- 73)・74) 前掲7) 99頁。
- 75) 集水域の小さい溜池では、たえず掛水路(集水路)の浚渫など、管理に努め、雨水時に自村の領域内にある掛水路に、水役先導のもと共同で集水作業にでる慣わしがあった(筆者、狭山池水下地域などでの聞き取りによる)。
- 76) 「陵墓地形図：二千分之一図、履中天皇百舌鳥耳原南陵之図」〔前掲1)〕では、ミサンザイ古墳の墳丘部は、三段築成で崩れがみられず整形を保っていることがとらえられる。
- 77) 前掲20) 366～368頁。
- 78) 前掲20) 367頁。
- 79) 大阪歴史学会2011年度大会：考古・個人報告での、森岡秀人氏の指摘による。

